

式 辞

今年度、晴れやかに開校一三〇周年を迎えた矢口小学校を、一年間、見事に全校児童のリーダーを務めながら、みんなの心に残る学校生活のために、下級生の世話をし抜いてくれた六年生の皆さん、ご卒業、誠に おめでとうございます。

また、保護者の皆様方におかれましても、子どもたちの健康管理に力を尽くしていただきながら、さらに本校の数々の教育活動に、たくさんのご協力をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

さらに本日は、私が校長に着任してからの卒業式としては初めて、ご来賓の皆様をお招きすることできました。常日頃より、子どもたちを温かく見守ってくださるご来賓の皆様と、子どもたちの卒業を祝えることも、本日の喜びのひとつであります。本当にありがとうございます。

さて、卒業生の皆さん、私がこの卒業式で毎年、花向けの言葉として、語っていることがあります。それは次のようなことです。皆さんは今日、学校の校門を出た瞬間から、大田区立矢口小学校の「卒業生」という立場となります。矢口小学校の伝統は、地域に愛され、地域の誇りとなっている、そして卒業生の心の宝となっていることにあります。

学校の最大の評価は何か。それは卒業生が社会の中で大活躍しているかどうかなのです。有名にならなくてもいい。普通の生き方でかまわない。どんな生き方をしてもかまわない。けれど、あなた方、一人一人の胸

の中に赤々と燃えている、「矢口魂」があるかどうか。それがこれからの人生の支えとなるはずです。

「矢口魂」とは、「高い目標に向かって、一生懸命頑張る気持ち、全力で取り組む姿勢」を続けることです。あなたの夢は、目標は何だろう。どうか何歳になっても目標をもち続けてください。この学校精神を、あなたの中で年々高めたり、深めたりしていくことが伝統となります。

ここで、学校精神を行動で示した、ある中学生の姿を二つ紹介します。その中学生は、都内のある区の第三中学校という学校の生徒二人でした。横断歩道で体の不自由なおばあさんがいることに気づき、自然に道を渡る手助けをしたそうです。それを偶然見ていた教育委員会の先生が、二人に声をかけ、褒めたところ、

「当たり前のことをしただけです。私たち三中生ですから。」

と答えたそうです。この「私たち三中生ですから。」という言葉に、学校精神を自分のものにしていく姿があります。

皆さんの先輩にも同じような人がいます。中学校に進学後、勉強も部活動も一生懸命頑張っている生徒に、中学校の先生が「そんなに頑張れて、すごいね。」と声をかけました。すると、「私、矢口出身ですから。」と言ったそうです。

ここにいる卒業生の皆さん一人一人も、コロナ禍であっても、全校児童が小学校生活を楽しめるために、矢口魂を背負いながら頑張ってきました。

したね。委員会、クラブ活動、なかよし班、行事での係活動など、後輩のために努力してきました。都内のどの学校もやっていない「鎌倉実地学習」も二年間かけて、皆さんが作り上げました。一泊しかできなかった伊豆高原での移動教室でも、三日分くらい楽しみ切ったと感じられるほど、協力して成功させました。それだけのパワーあふれる皆さんです。これから行く中学校で、頑張ることが当たり前、「だって私、矢口出身ですから。」と誇らしげに語ってください。

私は教師という仕事に就いて三十五年たちますが、どの時代であっても、日々成長し続ける、皆さんのような十代の子供たちの姿を見るたびに、未来に希望を感じます。皆さんが目指す未来は二〇五〇年です。私も自分の小学生時代から、「君たちを待っている未来は二〇〇一年、二十世紀だ。」と言われ、それを意識して育ちました。ここにいる君たちを待っているのは、二十一・五世紀です。その時、社会の様々な舞台で大活躍する姿を心より楽しみにしています。

皆さんの未来には、可能性の扉が開かれています。新しい時代の新しい課題がたくさん出てくる時代です。しかし、課題を避けて通らず、面と向かい合って、どうか力強く、生き抜いていただきたい。そのように心から祈りをささげ、卒業式の式辞といたします。

令和四年三月二十四日

大田区立矢口小学校 校長 井上 光広